

鈴木有郷名誉教授・宣教師に感謝して

院長 深町正信

青山学院大学文学部教授の鈴木有郷宣教師は、去る2004年3月をもって宣教師としての定年を迎えて、青山学院大学の職務からも退任されました。鈴木先生は米国合同メソジスト教会の宣教師として日本に來られ、青山学院を主として、他のキリスト教学校、また、日本の諸教会の宣教活動に積極的に関わり、良い奉仕をなしてくださいました。

鈴木先生は最近の8年間は、特に青山学院大学で宗教部長を務めながら、学院宗教部長をも兼任して、青山学院におけるキリスト教活動の先頭に立ち、よいリーダーシップを発揮してくださいました。抛職上は、学校法人青山学院の評議員として理事会列席者であり、また、学部長会、大学協議会、常務委員会、大学宗教主任会、大学宗教委員会、学院宗教主任会等の中心的メンバーとして熱心にその責任を果たし、奉仕してくださいました。

更に、第二部運営委員会、人権教育委員会、セクシュアル・ハラスメント防止委員会、学生相談センター委員会、学生部委員会、学友会等に関わり、その責任を果たされました。

鈴木有郷教授はアメリカのランドルフ・メイコン・カレッジを卒業し、デューク大学神学部に進学し、そしてユニオン神学校で博士課程を修了して、Ph. D. (Doctor of Philosophy) の学位を取得されました。その後、先生はヴァージニア州やワシントン州のシアトルにある大学のキャンパス・ミニストリーや合同メソジスト教会の青年伝道の仕事を色々と経験されました。

そして、先生はアメリカの合同メソジスト教会の世界宣教局の宣教師に任命され、日本へ派遣されて来ました。爾来30年の間、先生は宣教師として、青山学院女子短期大学、青山学院大学、恵泉女学園大学にてキリスト教概論を講義しながら、大いに教育と研究に当たられ、熱心にキャンパス・ミニストリーに務められました。

この間に、鈴木有郷先生は多くの研究業績を積み、著書として出版してこられました。その代表的な書物として『ラインホルド・ニーバーの人間観』『アブラハム・リンカンの生涯と信仰』を挙げる事が出来ます。又、共著では『アメリカと宗教』（日本国際研究センター）、『民主主義とキリスト教』（青山学院大学総合研究所）、青山学院大学宗教主任研究叢書の論文では、「公的領域における意思決定のプロセスとキリスト教——70年代以降のアメリカを焦点に——」、「アブラハム・リンカーンの民主政治理解に見る宗教的次元」、「アブラハム・リンカーンにおける政治と道徳の関係——奴隷制との取り組みを焦点に——」等々があります。

先生のキリスト教神学には、特に、アメリカ宗教思想、キリスト教倫理の探求とその業績があり、その底流には政治学や社会学の視点があります。

鈴木先生は宗教センターで発行している『Wesley Hall News』に様々なことを書かれてきましたが、2004年3月5日、第79号に「思い出四つ」という一文を寄稿されています。それは青山学院において約30年間の宣教師としての働きを顧みて、心に残る生徒、学生との出会いを四つ記されたものです。

はじめはKちゃんと幼稚園にまつわる思いです。この子が肢体不自由児で、横断歩道を青信号中に渡りきれず、赤信号の中を一生懸命渡らざるを得なかった時のことです。車とクラクションを全身に浴びながら子供の背後から見守りながら歩く毅然とした態度の母親とそれに思わず付き合った先生は、通行人の冷たい視線に出会います。しかし、その前に進み出た中等部の女子生徒のお辞儀に、先生が慰められたというエピソードで、私は鈴木先生の人間愛の深い視線を感じました。

二つ目は竹山道雄の書いた『ビルマの豎琴』を取り上げた読書会における女

子短期大学の学生の感想であります。主人公の水島上等兵が、戦死した多くの戦友の骨を拾って供養するため僧侶になります。それはヒューマンズムを忘れた戦後の日本人を感動させた作品です。しかし、その短大生は、日本人だけでなくイギリス兵もインド兵もオーストラリア兵も大勢戦死したはずだから、彼のヒューマンズムには何か大事なものが欠けているのではないかと感想をのべたのです。先生は素直に真のヒューマンズムも民族的粹組や文化的制約を超えるものでなければならないという学生の感性を喜び、キリスト教宣教への問題提起と受け止められました。

思い出の第三は、米国の友人の娘が日本の大学に勉強に来たときのこと。彼女が鈴木先生を訪ねて渋谷駅で、どのバスか判らず困っていると、二人の女子学生が近づいて、親切に教えました。バスが来るまで一緒に話をしているうちに偶然彼女たちが青山学院大学の学生であり、鈴木先生の科目を履修していたことが判ったという訳です。困った人への援助を進んでする若者に教えることの出来たことを幸いと記しています。

最後の思い出は緑内障でしばらく精密検査と治療のために休講しなければならないことをクラスで話したとき、意外にも休講を喜ぶのでなく、正しい治療を受ければ大丈夫であると励ましてくれたことを先生は、彼らのその真の優しさに触れて喜ばれます。そして、世界が今、最も必要としている彼らのような人間を、今後も青山学院が一人でも多く育て、社会に送り出してくれることを祈念されています。この思い出四つは、先生の人柄、人格をもって学生が育てられていることを示しています。

1963年に、私が米国のノース・カロライナ州のデューク大学に留学したとき、鈴木有郷先生はジョージア州にあるランドルフ・メイコン・カレッジを卒業し、デューク大学神学部で学んでいたところでした。日本から来た私と山内一郎先生（現関西学院理事長）を暖かく迎え入れ、援助してくれました。先生は一見したところは背も高く、アメリカ生活が長く、最初は日系アメリカ人かと思いました。出会いは、大学図書館で勉強していたところ、突然、「僕、日本人です」といって握手を求めてこられました。爾来、今日まで鈴木先生と、その後

に結婚されたエリザベス夫人とともに親しく交わりを与えられてきました。このたび鈴木先生と夫人との別れは名残惜しく思うものであります。

実は、先生のご両親は若い日に伝道者として立たれ、お父上は早逝されました。その後、お母上は恵泉女学園の創立者を助け、留学生のために教えられたり、長く教師をされ、晩年は先生に見守られて長寿を全うされました。

鈴木先生はご自身で研究テーマについて次のように書いておられます。「キリスト教の信仰や価値観がピューリタンの時代から現在に至る歴史の流れの中でアメリカのヴィジョンの形成にどのように貢献して来たかを、キリスト教の墮落がもたらした負の部分も視野に入れながら考察して行くことが、私の研究テーマの中心である。この観点からアブラハム・リンカン、ラインホルド・ニーバー、マーティン・ルーサー・キングの思想と実践活動はもう一度見直される必要があるし、又、彼らとピューリタンとの思想的つながりも明らかにされねばならない」。アメリカで緑内障の手術を無事終わり、お元気になって、このテーマに取り組み、その研究の成果を発表されることを心から期待したいと思います。

終わりに、鈴木有郷先生とエリザベス夫人のアメリカでの新たな歩みの上に、主の豊かなみ恵みがあるように心からお祈り申し上げて、感謝の言葉といたします。

